

- 41 斎藤, 163.
- 42 斎藤, 157-171.
- 43 同年輩のユダヤ系劇作家である Arthur Miller (1915—) は, *The Crucible* (1953) [『るつぽ』] を発表している。
- 44 Peter Hyland, *Saul Bellow* (New York: St. Martin's Press, 1992), 31-40.
- 45 Hyland は, Keith Opdahl の *The Novels of Saul Bellow* (University Park, PA: Pennsylvania State University Press, 1967) を挙げている (33)。
- 46 [T]he 'fake euphoria' if that is what this is, is Augie's, not Bellow's, and it arises out of the tension generated by the competing pressures of, on the one hand, the literary device that represents unchanging idealism, and on the other the 'living' character that responds to experience and is modified by it (Hyland, 39).
- 47 佐伯彰一『批評家の自伝』(研究社, 1985年), 47-56.

Saul Bellow におけるシカゴへの回帰の意味 (池田)

83.

19 Miller, 10.

20 アルフレッド・ケイジン／大津栄一郎・筒井正明『ニューヨークのユダヤ人たち—ある文学の回想1940—60』(岩波現代選書, 1987年), 79-84.

21 渋谷, 65.

22 ケイジン, 93-105.

23 Miller, 30.

24 Barrett の記憶の中で, Bellow は他の敗残していったニューヨーク知識人たちとは違っていたようだ。“ [Bellow was] the writer destined to fulfill the promise, [and] the writer whose strategy was self-protection, the self-appointed contender, as if to have faith in himself was an affront to intellectuals and New Yorkers” (Miller, 211).

25 Cooney, 231.

26 ケイジン, 87.

27 Cooney, 234-42.

28 Cooney, 241.

29 Cooney, 242-44.

30 広瀬, 98. 広瀬は, この論文がローゼンフェルドを本格的に扱った唯一のものであるとしている。

31 渋谷, 96.

32 別府恵子・渡辺和子編『アメリカ文学史』(ミネルヴァ書房, 1989年), 174.

33 渋谷, 97.

34 ローゼンフェルドは, 彼の父を含むハシド派の信者が歌い踊り, 共同とエクスタシーの内に, 生の理解と充実を掴んでいるのを目撃して深い感動に打たれた, という (渋谷, 98)。

35 Miller, 212.

36 Saul Bellow, *It All Adds Up: From the Dim Past to the Uncertain Future* (New York: Viking, 1994), 101.

37 ロシア革命は「社会主義を, 民主主義的な夢から党という化け物へと変えてしまい, その化け物は, 遂には全体主義の悪夢へと成り果てる」という変貌を遂げた [ジョン・パトリック・ディギンズ「アメリカ史における知識人の役割の変化」小川晃一・片山厚編『アメリカの知識人—その意味するもの—』(木鐸社, 1988年), 33]。

38 『アメリカの知識人』, 7.

39 斎藤眞「変貌する知識人の役割—日本人の立場から—」『アメリカの知識人』, 159.

40 斎藤, 159.

- 3 Ruth Miller, *Saul Bellow: A Biography of the Imagination* (New York: St. Martin's Press, 1991), xvi-vii, 9-10. Miller は、師範学校時代の教え子であった。
- 4 Miller, 53; 渋谷雄三郎『ベロー—回心の軌跡』(冬樹社, 1978年), 67.
- 5 福田陸太郎は、1952年1月にザルツブルグの古城で開かれていた文学ゼミナールに参加して、講師としてアメリカから来ていたベローと会っている。[福田陸太郎編『グリーン氏探索他三篇』(開文社)「はしがき」]
- 6 Miller, 54-55. ニューヨークを離れてプリンストンヘシュワルツと共に行ったことには、糟糠の妻 Anita との間に生き方のくい違いが生じたらしいことがうかがわれる。彼女は、才能を認められ始めて俄かに身辺が賑やかになった、作家の夫に付いて行けなくなったようだ。1953年、*The Adventures of Augie March* で全米図書賞を受賞した時、祝賀の席には56年に結婚することになる Aleksandra Tachabasov が同席していたと言う。
- 7 Ben Siegel, "Simply Not a Mandarin: Saul Bellow as Jew and Jewish Writer" in Melvin J. Friedman and Ben Siegel, eds., *Tradition, Voices, And Dreams: The American Novel since the 1960s* (Newark: University of Delaware Press, 1995), 63. ベローが3歳のとき、一家はモンリオールへ出た。
- 8 渋谷雄三郎, 14.
- 9 短編“What Kind of Day Did You Have ?”(1984)では、登場人物の一人である Victor は幼少の頃病気になった経験を持ち、その回復期が芸術作品を生み出す創作過程に似ている、と述べている。この感覚は、ベロー自身の体験から生まれたものであろう。池田肇子「ソール・ベローと階級」『福岡女学院大学紀要』第3号(福岡女学院大学, 1992年), 115-29. 参照。
- 10 渋谷雄三郎, 16.
- 11 “Liza Bellows died much before her time, but she likely would be pleased to know critics have found a strong Talmudic or rabbinic imprint on her son’s work” (Ben Siegel, 67).
- 12 Ben Siegel, 67.
- 13 渋谷, 16.
- 14 渋谷, 17.
- 15 Gordon Lloyd Harper, “The Art of Fiction: Saul Bellow” in Gloria L. Cronin and Ben Siegel, eds., *Conversations with Saul Bellow* (Jackson: University Press of Mississippi, 1994), 62-63.
- 16 渋谷, 40-43.
- 17 Siegel, 65.
- 18 広瀬佳司『ユダヤ文学の巨匠たち—シュレミールの批評精神』(関西書院, 1993年),

主人公オーギーを通して生き残り勝利する他の者の生き方を吟味検討しながら、ユダヤ人居住地周辺にあった人生の知恵、生活上の知識を学ばせて一人のリアルな人物造型を実現している。オーギーは、「風変わりな、我こそ人生の達人だと自ら主張する面々」[“eccentric self-proclaimed experts on life” (Hyland, 32)] との交流に曝され鍛えられながら、30歳半ばに達している。

従って、この小説は、オーギー・マーチの自伝的一代記ではない。ユダヤ人移民二世のソール・ベローが、アメリカの大不況時代から第二次世界大戦後あたりまでを時代背景にして、ユダヤの伝統としてのユダヤ性、自身が知識人として獲得した視点および成長の地アメリカに対するプロ・アメリカニズムを、作品の中で融合しようと試みたものである。

ソール・ベローが、未成年のころに傾倒したトロツキイズムの成果は、彼の場合小説の形式で表れたのであった。彼は、左翼思想を議論し合うニューヨーク知識人のサークルに加わるうちに、自身の作家的アイデンティティを明確に意識するようになったであろう。ベローには、ニューヨークではなくシカゴという成長の地があり、父祖伝来のユダヤ的伝統は知的職業人となってからも原点にあった。シカゴのユダヤ人居住地こそ、作家ベローが幼い頃に感受性を鍛えられた原風景だった。シカゴに戻らなければ、原風景を再確認しなければ、自身のユダヤ性やアメリカにおける知識人としての作家的立場も確立し得ないと、認識したからである。

注

- 1 Terry A. Cooney, *The Rise of the New York Intellectuals* (Madison: The University of Wisconsin Press, 1986), 249. Rahv は、2月16日付けの友人宛の書簡では、“this dismal place (Chicago)”を離れてニューヨークの(グリニッジ) ビレッジに戻りたいと訴えている。*The Adventures of Augie March* の冒頭の “Chicago, that somber city” と思い合わせると、当時のシカゴが持つ共通のイメージと考えられる。
- 2 中野康司「ルイス」『イギリスIII』[世界の文学4] (集英社, 1991), 1178.

そこで、Hyland は、二つのラベル—ピカレスク小説とビルドゥングスロマン—について考察する。本小説は、一青年の成熟への進展を詳述する、ピカレスクのように自叙伝体の小説形式であるが、この場合、主人公は実際に性格発展を経験し、また小説の構造は、その発展過程から派生している。Hyland は、これら二つの形式は似通っているが、ピカレスク小説は外的世界に、ビルドゥングスロマンは主人公の内的成長に重きをおく点で、互いに相容れない、と区別した上で、*The Adventures of Augie March* は両者の特徴を兼ね備えようとしている観があって、この二形式間の緊張感からいくつかの問題点ばかりでなくその効果の一部は生じている、と判断する。

Hyland は続けて、両形式における主人公の相違を論じる。ピカレスク小説の主人公は、本質的には修辭的技巧(“device”)であって、外部の社会を表現し諷刺するために用いられるのに対し、ビルドゥングスロマンの主人公は、自身の信念に関わって生きなければならない、実際の内的生活を持った十分にリアルな人物である。更に Hyland は、*The Adventures of Augie March* では、両形式の相反する必要条件が、一人の登場人物でありながら時には技巧として機能しなければならない中心人物の中に、付随した矛盾を提示していることを明察し、オーギーは、弱肉強食的物質世界にあって他の者が生き残り勝利する生き方を検討するために、技巧として用いられていると結論する。そして、結末の「見せかけの幸福感」(“fake euphoria”) というものは、作者ペローのものではなく、主人公オーギーのものであって、一方では不変の理想主義を表す文学的技巧の、また一方では経験に対応しそれによって修正される「生身の」(“living”) 登場人物の持つ、競い合う圧迫によって生じた緊張状態の結果として生まれた、と解釈する。⁴⁶ かつて、新進批評家の Norman Podhoretz (1930-) が“false spontaneity” (「見せかけの自発性」) と指摘して、ペローをいたく刺激したと言われる問題点は、⁴⁷ このような説明が可能であったのである。

かくして Hyland は、オーギーが作者によって、生き残り勝利する他の者の生き方を検討するために、技巧として用いられていると見抜いた。作者は、

ベローは、*Partisan Review* のシンポジウム“*Our Country and Our Culture*”(1952)を受けて、また恐らくは、ケイジンの *On Native Grounds* (1942) (『生国の土の上で』)に啓発されて、1953年 *The Adventures of Augie March* を世に問うた。⁴³ 本書は、プロ・アメリカニズムを謳ったものとして、一般読者に歓迎され全米図書賞を受賞した。マッカーシー旋風の吹く中で、雄々しくアメリカ人であることを宣言したユダヤ系作家の目的はいかなるものであったのだろうか。カナダで生まれたとは言え、移住して来た9歳の時から後年〔筆者注：1993年〕ボストンへ移り住むまでシカゴに40年近く居住していたから、ベローにとっては、シカゴ＝アメリカであって、ニューヨークで生育したケイジンとは一ケイジンがローゼンフェルドに同行して来たベローを観察して、「シカゴ育ちの青年」という印象を持ったように一まるで(アメリカ人) 気質が違っている。このことを誰よりも強く意識したのは、当のベローであったに違いなく、ニューヨークを覗いたからにはシカゴのユダヤ人地区を描かなければならなかった。また、知識人としての作家の使命は、知識人の生態をつぶさに伝えることによって、自身の立場も確認することであろう。それには、どこよりも知っているシカゴを舞台に、何よりも分かっている自身の経験を素材にして、自身が感じ取っている人生の様相を書き記すことが、内心から湧き起こってくる衝迫であった。

従来より *The Adventures of Augie March* に関して、様々な論議がなされてきたが、Peter Hyland は著書 *Saul Bellow* (1992) において、主要な論点を手際よくまとめている。⁴⁴ 彼は、ベロー自らも称していたという、ピカレスク形式について論証する。伝統的なピカレスク小説は、主人公ピカロの経験(冒険)に基づいて構成され、従ってしばしば自伝の形式で表現される。ピカロは、普通身分の低い悪漢(“bad boy”)で、小才を働かせて世渡りしながら、社会で出会う人々をからかいの対象とする。世間を渡りながらも、ピカロは大抵の場合、いかなる性格発展も経験しない。ところで、批評の中には、本書を *Bildungsroman* と判断して、主人公の内的発展を認める、と主張するものもあった。⁴⁵

existentialism, he readily conceded that it was a phenomenon produced by the decomposition of the bourgeois carcass. The only public at present available to him came, disgustingly, from the intelligent sector of the rotting bourgeoisie (victims, no doubt, but tyrants also) (Bellow, 107).

ベローの表現に依れば、サルトルはペテンということになる。彼は、解放を求める労働者は、我々全てをも同じく解放すると主張しながら、実存主義とは腐敗したブルジョワの形骸によって生み出された現象である、と安直に認めている。彼にとって利用できる民衆は、腐敗しているブルジョワのインテリ層—犠牲者だが明らかに暴君である—であったのだ。

ところで、斎藤眞は、アメリカが18世紀の末に独立した後、急速に発展したことの原因と考えられる三つの要素として、豊かな自然、身分制の欠如、及び人的資源の有効的な利用を挙げている。³⁹ さらに第三の要素に関して、斎藤は「人間の生産性という点から言って、教育、知識が重要なのであって、その意味で知識は一種の力でなければならない」と考えている。⁴⁰ また、「アメリカでは、普通の人々が鉄砲を使い、聖書について語る事が重視される」ように、「普通の人々が知識をもたなくてはならない」とする。そして、職業としての知識人が生じたのは、第一次世界大戦の「失われた世代」—失われたとは言え、彼らは知的分野では最も生産的な世代であった—からであると観る。⁴¹ 従って、斎藤は、アメリカの知識人の特徴として、知識を手段として活用し、社会に対して疎外感よりも参加の意識が強く、社会になんらかの貢献をするのだという意識を持つ、と結論している。⁴²

ニューヨーク知識人の出発点には、ヨーロッパ文化に基づくコスモポリタニズムと革命を理想とするマルキシズムとがあったのだが、いずれもアメリカ固有の思想ではないこと、また、芸術家の本性自体がグループを成して行動することとは相容れないなどが作用して、ソール・ベローや William Barrett など早々に知識人グループから抜けて行く者もいた。

に到着した当日、彼らは暗殺を告げる新聞の見出しに出くわした。その上、二人は、ジャーナリストと間違えられたのか、頭は包帯でぐるぐる巻きになったトロッキーの遺体が安置された部屋に通された、と言う。³⁶ 彼らにとっては、知の巨人とも言うべきトロッキーの無念の死は、強い衝撃をもって受け止められたに違いない。たとえ何人も及ばぬ知性を持っていても、独裁君主の仇敵となれば、その国家の強大な権力にとっては一人の人間の命をねらうなど容易なことであった。³⁷ メキシコでの衝撃的体験はやがて、ベローの中で人間社会における知識人としての無力感へとつながっていったであろう。

Partisan Review を中心に集まった、いわゆる「ニューヨーク知識人」と総して呼ばれる作家や批評家は、戦後のアメリカの繁栄と共にそれぞれアカデミックな世界に職を得てブルジョワ化し、かつてのラディカルな批評精神を失ったかのようであった。そもそも「創造的な芸術活動に従っている者たちに、いわば徒党を組むことなどは期待できない」³⁸ のであって、このサークルの中に溶け込んだが故に自己の独自性に目覚めた者も多かったに違いない。しかし、「ブルジョワ化」という内部批判の中で、アメリカ社会の中産階級化の波に乗り、ユダヤ人は大きくその勢力を伸ばしていた。作家たちは、極めて個人的な問題をリアリズムを駆使して、現代の不条理のなかでいかに生きるかという普遍的な問題へと高めたのである。

ベローの場合、二年間のヨーロッパ滞在が、アメリカを離れて見る余裕と冷静さを養い、作家として自己の拠って立つべき地歩を確認する機会となった。彼は、現実のヨーロッパに我が身を浸すことによって、*Partisan Review* が標榜するコスモポリタンの価値観を、再検討することができたであろうし、また、自己のユダヤ性を思い知ることにもなったであろう。殊にサルトルに対する彼の幻滅は、印象的である。

He [Sartre] asserted that the workingman seeking liberation would liberate all of us as well, and for all time. The French CP was an obstacle standing between Sartre and the working class. As for

らの理想—世俗的に、即ち政治によって、ハシディズム的生き方の実現を夢見ていた—を守ったのである。³⁴ 彼は、かつて二重の疎外をその運命としたユダヤ知識人たちが肥え太って行く様を苦々しい思いで傍観し、自分の観念を自らの生で体現しようと奮闘していた。そして、世の流れに乗らないことで、逆に押し潰されて行った観がある。長年に亘ってペローとの交友関係を持つ伝記作者 Ruth Miller は、親友たち—ローゼンフェルド、シュワルツ、さらにジョン・ベリマン（1914—72）—の死に対するペローの思いを、代弁している。

Why could Schwartz or Rosenfeld or Berryman not choose to attack the judges instead of themselves, attack their sterility, castigate their crippling of students, denounce their indifference to art, their lack of moral passion, and go on with the trade of poetry, nurture their imagination, the wellspring of art? Why choose instead to pollute their bodies and prostrate their souls? (212)

なぜ彼らが、自分自身にではなく世間の評価、自己の不毛性、芸術に対する無関心、道徳的熱情の欠如に立ち向かって、創作を続け、芸術の源泉である想像力を養うことを選ばなかったのか。なぜ自らの肉体を冒瀆し、その魂を屈服させたのか。こうしてペローは、若き日の友情から自身を解放した。³⁵ しかしながら、生き残ったペローには、芸術を追求するという孤独な苦しい闘いが続くのである。

シカゴへの回帰

1940年、ペローが大学時代にローゼンフェルドらと共に心酔したトロッキーは、逃亡先のメキシコで暗殺される。ペロー自身の回想によれば、人を介して友人と二人でトロッキーに会う約束をうまい具合に取り付け、メキシコ

リカ・ユダヤ人の集団市民化」[“massive embourgeoisement of Jews in America” (270)] と看破している。³⁰

渋谷雄三郎に依ると、上掲のシンポジウムの基調はアメリカの再確認であり再発見である。³¹ 両大戦を経験したアメリカは、ヨーロッパから自立したアメリカ文化の確認を果たし、世界の大国として戦後世界の平和と経済を担うこととなった。一方でソ連は、東欧諸国を共産主義化し、もう一つの超大国として勢力を拡大していた。ジョセフ・マッカーシー上院議員によるマッカーシズム (1951—54. 12) は、国際共産主義の浸透を恐れて、政府職員の忠誠テストや映画人、文化人や作家やジャーナリストなどの赤狩り旋風を巻き起こし、反共ヒステリーとなっていく。その間、ローゼンバーグ事件(1951)が起こり、共産党の非合法化 (54. 8) が決定した。しかし、この「魔女狩り」の嵐は、上院の公式弾劾を受けて収まり、国民は「物言わぬ世代」となって物質的繁栄に満足し、順応主義的風潮がはびこる。³² 保守化のムードのなかアメリカは、アイゼンハワー政権 (1953—1961) のもとで、空前の繁栄を迎えつつあった。

1953年、*The Adventures of Augie March* が出版された時、冒頭のプロ・アメリカニズム的なホイットマンの‘Song of Myself’ [*Leaves of Grass* (1855)] を偲ばせるアメリカ人宣言で始まる小説は、その力強い悪漢的な表現もあいまって熱狂的に歓迎されたのであった。いかなるグループに属することも拒否するという意味で自由であった、元トロツキストの若手作家は「時代の動きと共に民主主義的資本主義を容認するリベラリスト」³³へと転向していたとも考えられるが、このような政治的立場からの解釈よりも、ケイジンの *On Native Grounds* (1942) を先駆けとする、ユダヤ移民二世たちの生国アメリカでのアメリカ人としてのアンデンティティを謳う書と解する方が、理解しやすいと思う。

50年代、豊かな社会に門戸を開放された知識人たちは、トロツキズムも含むマルクシズムと訣別し、反共主義的見解が強化されるなかで、大学に職を得るなど市民化して行った。その中で、ローゼンフェルドは妥協を拒み、自

took their bearings from the sense that they stood outside *two* cultures. It was Jewishness that allowed them to claim, with some accuracy, that their plight was a heightened form of the typical plight of intellectuals. It was Jewishness that made possible the assertion of a double exile that promised exceptional insight (Cooney, 242).

そして、知識人たちは、自らの文化を創造し、アイデンティティの確立を次なる課題と考えた。1940年代後半においては、西洋の文学伝統にある反ユダヤ主義を克服するには、ユダヤ人が次第に「共通の人間体験」[“common human experience” (244)] を代表することを可能にするような世俗化のプロセスを踏む必要があるとし、1949年の *Commentary* における“The Jewish Writer and the English Literary Tradition”という特集に寄稿した作家たち—ローゼンフェルド、ベロー、ケイジン、ラーヴなど—は皆、理性および「共通の人間性という理想」(“the ideals of common humanity”) に対する彼らの忠誠心を証明していた。²⁹

ユダヤ人が文学的一勢力として急浮上したのは、戦争によって開放され、戦争によって「自由世界」の支配が可能になった、ユダヤ人の経済的地位の向上によるものであった。大不況を一掃した戦時景気が戦後も続いて、アメリカ社会が未曾有の経済的繁栄を享受していた時、知識人に大きく門戸が開かれ、閉鎖的なサークルに固まっていた知識人の多くは、大学へ招聘されていった。52年、*Partisan Review* は“Our Country and Our Culture”というシンポジウムを行った。同誌の編集者たちは、「大抵の作家たちはもはや、アメリカにおける芸術家の運命としての疎外を受け入れない」[“most writers no longer accept alienation as the artist’s fate in America” (Cooney, 270)] と断言して、同誌の社会観の変化を示唆した。ラーヴは、戦後のアメリカのインテリゲンチヤにおけるブルジョワ化を指摘し、後の76年の *Partisan Review* に“Isaac Rosenfeld’s World”を寄稿した Mark Shechner は、「アメ

“Under Forty: A Symposium on American Literature and the Younger Generation of American Jews”と特集した寄稿論文を掲載した。シュワルツは、「ユダヤ人は、現代の状況を理解し分析するのに極めて適している」という信念において、先輩知識人とは異なっていたし、ローゼンフェルドの意見は、作家がユダヤ人であることの有利性を主張していることで大半を占めていた。²⁷ 彼は鋭くも、周辺人 (“marginal men”) としてユダヤ人は他のどのグループよりも影響を受けやすいのだから、コスモポリタンの知的パースペクティブを推し進めるのに、特に適していると考え、現代生活は非常に複雑であるので、誰もその全体を所有することは出来ない故に、アウトサイダーはしばしば、完全なインサイダーになる」と明察して、ユダヤ人の「周辺性」(marginality) と『パーチザン・レビュー』創刊時からの主張であるコスモポリタニズムとを統合して見せた。また、ソール・ベローの *Dangling Man* を引用して、“in every society, in every group, there are what Saul Bellow has called ‘colonies of the spirit.’ Artists create their colonies. Some day these may become empires.”とぶち上げて、『パーチザン・レビュー』の面目を立てたのである。²⁸ この特集号にベロー自身は、書評を出していたのだが、これら三人の若き作家の姿勢が微妙に異なっている点が、興味深いところである。

ニューヨーク知識人の中のユダヤ人たちは、二重の疎外を受けている一二つの文化の外側にいる—という立場を確かめた。知識人としてはアウトサイダーであり、ユダヤ人としてはエグザイルであるからだ。Terry Cooney に依れば、ユダヤ性の故に、彼らの苦境は、典型的な知識人の苦境をより高めたものであると、主張し得たのであり、ユダヤ性の故に、格別な洞察を約束する二重の疎外を主張し得たのであった。

The idea of the intellectual as outsider had, in one form or other, a very long history ; so, too, did the idea of the Jew as exile or wanderer. Those among the New York Intellectuals who were Jews

身は称している—小説の文体の束縛から解放されて、シカゴのユダヤ人地区にあふれている豊かな人間模様を描き出した、エネルギーのほとばしる文体へと変わったことである。表現形式の変化は、もちろん内容の変化をも含んでいた。ニューヨークを離れたことを契機にして、ベローは『パーチザン・レビュー』サークル、つまりニューヨーク知識人からの離脱を—そもそも、ベロー自身は巻き込まれるほどに、傾倒していたわけではないことは、いくつかの証言があった—言い換えると、自身の作家的スタンスの確立を図ったのである。初期のニューヨーク知識人のコスモポリタニズムは、ヨーロッパ文化をアメリカに取り入れたのであったが、元来からあるアメリカ文化との闘ぎ合いが、「ある居心地の悪い距離」[“a certain uncomfortable distance” (Cooney, 6)]を生み出していた。Delmore Schwartzの短編“In Dreams Begin Responsibilities”は、次世代のニューヨーク知識人の意識を先駆的に表現している点でも、注目されたのであった。シュワルツのトーンは、「飽くまで都会的」であり、「ユダヤ移民」と「誇りをもってアメリカ文化へ移行するその息子」の両者を語っていたからである。²⁵ ベローやローゼンフェルドも関わってくる、大不況後の第二世代の知識人サークルでは、マルクシズムは影をひそめ、ファシズムとトロツキーを追放したスターリニズムに反対する(社会)民主主義的な^{コミュニティ}共同体となっていた。そして、Edmund Wilsonが『パーチザンスキー・レビュー』と皮肉ったように、²⁶ 多くの才能豊かなユダヤ人たちが集まっていたが、必然的に論題は「ユダヤ性」に焦点が置かれることが多かった。

知識人の変貌

1940年代、『パーチザン・レビュー』知識人は、ユダヤ人としてのアイデンティティの問題を普遍的レベルへと拡大して行った。ユダヤ人作家もまた、文化的アイデンティティを確立する必要性を感じたからである。1944年、*Commentary* 誌の前身とされる *The Contemporary Jewish Record* は、

験を文学に変える」才能を見て取り、「彼がイーディッシュ語風の、またユダヤ人風の冗談が好きな」「大都会の下層階級の生活に愛着をいだいて、自分をユダヤ人の作家として深く意識している」からこそ、術学的な著名人を槍玉にあげてやっつけていたのを、胸のすく思いで聞いていたが、ベローに関して「人生のあらゆる分野についてビジネスマンのように要領のいい、ぼくが会ったなかで最初のユダヤ人だった」と回想している。同年輩ながら、ケイジンに言わせれば、ベローは「人生を知っていた」のである。

若きベローについて語った、もう一つの印象記を見てみたい。*Partisan Review* の寄稿者の一人であり、自身もベローと同様、後に離れて行った William Barrett は、ニューヨークへ出て来た頃のベローについての印象を書き記している。ベローが、ニューヨークに滞在している時は必ず”*Partisan Review circle*”と連絡を取ったが、入り込もうとはしなかったことから推して、バレットは、ベローがニューヨーク知識人を観察し、彼らから刺激を受け、彼らから作家としての職業が必要とするものを学び取らなければならなかったのだと判断している。さらにバレットは、ベローの自身の芸術に対するひたすらな専心に感銘を受けて、彼が創作した一連の堅実な (solid) 作品は、性格の勝利 [“a triumph of character”] として称賛されるべきだと、述べている。²³ ベローよりも先にニューヨークに進出していたローゼンフェルドは、作家としての自身の方向を定め兼ねながら、やがて主題としての自分を基に表現することに狂奔して行った。彼が、ニューヨーク知識人の社会の中に、言うなれば、取り込まれて行ったのに比べると、ベローは自身の才能のありかを自覚していたのかも知れない。²⁴

前述したように、ベローはヨーロッパ滞在中の1948年から50年の二年間、シカゴで成長していく *Augie March* を書き進めていた。本国から遠く離れた場所で書く、故郷シカゴを舞台とした物語の筆は、大いに進んだと言う。ところで、500ページを越えるこの長編第三作 *The Adventures of Augie March* (1953) は、ベローにとっては格別の意味を持つ作品となった。一つには、前二作に見られる、これまでの抑制した19世紀的—フローベル的と彼自

そして、ケイジンは、ニューヨーク生まれの自身と引き比べてシカゴ出身の青年、ベローとローゼンフェルドの「考えられるかぎりの疑問をぶつけて経験を検討する」という「率直な姿勢はシカゴそのものの産物」であると感じ、両者の態度から「シカゴには人間を解放的にする中西部独特の気分が、アメリカを住み易いところにする気分がある」と判断した。それには、ケイジンの考えでは一実は、誤解もあるが一シカゴ大学学長ロバート・メイナード・ハッチンズが醸成しようとしていた「偉大な書物」^{グレイト・ブックス}に基づく学風が、「現実に対する彼（ベロー）の目を鋭敏にするのに貢献した」とみているが、ここで興味深いのは、ベローはシカゴ大学のこの学風に馴染めずにノースウェスタン大学へ編入し、文化人類学を専攻したのに対して、ローゼンフェルドは、ベローの言うところの、黄色味がかかった顔色が、30年代のシカゴ大学ではより好まれた知的な顔色をした²¹、そのようなシカゴ大学出身の若き哲学の徒であった。大学と専攻分野の違いは、存外にその後の二人の作家的姿勢に大きく関わったように思われる。

ケイジンの目には、シカゴ育ちのおかげで、根は真面目ながら二人とも他の者にはない自由な精神を持っていると映ったようだが、やがて、ベローは、自由な精神で自分の経験をあますところなく活用しながら、「彼の小説の核心を形成している、苦しみ、前進し、華々しく模索する彼の成長の声として、劇化していった」のに対して、ローゼンフェルドは、「自分のまわりがいつも少し混雑して」「自分の幻想のなかで生き、人なかで生きながら、観念の殉教者」となり、それを作品として表現するのではなく、「自分の生活で熱狂的に表現しようとしていた」。そのうち、ローゼンフェルドは、自身の「動物性」の問題に戻って行き、自らを主題とすることにより、アメリカのブルジョワ社会の生贄となっていった。「地上のできごとと妥協する能力を欠いていた」（ケイジン、104）ローゼンフェルドは、「万事に早熟で、当然すり切れるのも早く」（ケイジン、104）一種の敗残のうちにこの世を去った。²²

ところで、ベローは、英文学専攻がかなわなかったユダヤ二世として、内心期するところがあつたに違いなく、ケイジンは、ベローの中に「自分の体

に進んだローゼンフェルドの方が先であった。論理学を専攻したが、「哲学の徒ではあったが、理論構築の才に欠けていた」¹⁸と言われるローゼンフェルドは、次第に創作活動に傾注し始め、大学院は一年たらずでやめて、*New Republic* や *Partisan Review* などに寄稿する新進気鋭の知性派小説家として、前途を嘱望されていた。ライヒの心理主義に心酔し、オルゴン・エネルギー集積器による生体エネルギーの探求に凝ったりしたが、彼の場合は、文学、文化、感受性を前提にしていた。51年、ローゼンフェルドは、長編小説の出版を拒否されたことに打撃を受け、*New Republic* 誌に書評を書く以外殆ど物を書かなくなる。新婚生活を支えてくれた妻とも離婚し、52年ミネソタ大学へ赴任した後、シカゴ大学に戻ったが、56年7月心臓マヒで孤独に死ぬ。

ペローの“Isaac Rosenfeld”という追悼文や、ローゼンフェルドがモデルとされる“Zetland: By a Character Witness” (1974)¹⁹では、ローゼンフェルドの生来の特異な体質のために健康に恵まれなかったにも拘わらず一否、それゆえに一早くに才能が開花して、神童と言われた早熟の器が生き急いだために未完に終わったことに対する、親友としての哀惜の念の方が強く伝わってくる。既述したように、ローゼンフェルドを通じてペローとも知り合ったケイジンが、40年代の両者のニューヨーク時代を詳細に描いている。

ペローと同じ年のケイジンは、ニューヨークに出て来たばかりのペローを生地ブルックリンに案内した。ペローは、町を歩きながら冷静な観察者としての態度を崩さず、たまたま目にした微細なことを題材にして人に見させるという才能を披瀝した。シカゴ育ちであることに誇りを持ち、あらゆることを話題にしながら、自分の運命は小説家になることだという意識を辺りにただよわせて、気取りのないひょうきんさで周囲の人間を魅了していた。ケイジンは、「都会育ちのユダヤ人の知識人たちには見られない、野心的な、ひたむきな人間だった」(81)と観察しながら、自分と同じ年のユダヤ青年が、人生を高いところから、誇り高い使命感をもって眺めていることに感動している。²⁰

シカゴ出身の新進作家

既述したように、二重言語のカナダ・モントリオール、ケベックへ移住して来た東欧ロシア人の家庭では、母語としてのヘブライ語とイディッシュ語に英語、フランス語が混在した。末っ子のベローは、これら多重言語の中に溶け込みながら入院などの事情も手伝って、本を読むことや想像力を発揮して一人で空想することで時間を過ごすことが多かった。

シカゴに移住してベローが少・青年期を過ごしたのは、ユダヤ人自身も含むヨーロッパからやって来た新移民が置かれた環境の中であった。このユダヤ人地区は、これら移民がアメリカへもたらした多様性の中で、新世界に適応しようと努力する熱気にも溢れていた。このような生き様を祝福する心で書かれたのが、*Augie March*であったのだ。¹⁶

しかし、現実のソロモン少年は、この地区に、ある種のエキゾティシズムを感じてはいたが、新天地における参加者であると同時に、周辺に立つ観察者でもあるという感覚を拭い切れなかったようだ。Ben Siegelは、この点について、母親の流民意識（displacement）が根強く末子ソロモンの感受性に伝わり、彼自身の疎外感（うちとけなさ）の一因となった、と見ている。¹⁷そして、街の子ソロモンは、中西部のプロテスタント達に囲まれたユダヤ人地区にあって、様々な人間模様に曝されながら持ち前の感受性を鍛えていくことになる。

生育環境で受け入れた多重言語とその文化が織り成す混沌とした熱気は、やがて若者達に爆発的な活力を与える。自身が受け止めたものを、何かの形式にあてはめて表現する必要があった。移民の、しかも社会に実権のない早熟な青年達にとって、自己の表現手段は言語である。ハイスクール時代の文学会や討論クラブにおけるベローやローゼンフェルドの活動は、そのことを物語っている。

ところで、大都市ニューヨークへ出たのは、ニューヨーク大学の博士課程

は、高度に知的な思索に没頭している長老たちと、彼らを信じ切っている無垢の民衆から成っていて、長老たちは過剰の知性行使の結果常に誤りを犯すことになる。救世主の下に「選ばれた民」の誇りと責任において、「他の民族の光」となるべく神の言葉を日常生活の中で遵守すれば、個人は神の前に永遠性を付与され、世界は救世主によって救われるだろうという確信は、民衆の置かれた現実の状態との乖離を際立たせていたであろう。そんな中でハシディズムは、日常の卑俗にあって神の現前を経験し、法悦に浸ることができることを教えて、民衆の心を捉えたのである。¹³ 渋谷雄三郎は、さらに、ユダヤ系文学の特色の一つとして、Bernard Malamud や I. B. Singer の描くユダヤ的ユーモアを論じて、東欧ユダヤ人の恒常的貧窮と絶望感に発しているユダヤ的ユーモアは、「エスプリとかウィットというような高尚な香りに欠け、滑稽と切なさ自己憐憫の卑俗な混合物である」とする。¹⁴ Ludwig が指摘した特性と照合してみると明らかになってくることは、ベローは作家としては、タルムード学者的姿勢で、即ち、民衆のために現実の解釈に苦心する立場から出発した、ということである。

1953年、かつて大学院進学の際に英文学教授に言われたことに対するレスポンスとして、自身の原点たるユダヤ性に戻ったことの証左が、表される。一つは、Isaac Bashevis Singer のイディッシュ語で書かれた短編“Gimpel the Fool”を英訳したことであり、また、これまでの作風—殊に文体—をがらりと変えたとされる *The Adventures of Augie March* が出版される。この作品により全米図書賞を受賞して、作家ベローの名声はニューヨーク知識人の中での「地方的な」作家から、全米的な舞台に現れたアメリカの作家になった。作品 *Augie March* について、ベローは、初期の二長編を書く際に意識した規制—文学上の約束事や力量の誇示—をかなぐり捨てて、自分を解放し自由に書くことのできた作品であったと、語っている。¹⁵

カゴに移住して後も環境の変化に馴染まず、夫の事業の失敗などで年かきの息子たちが生計を助けるため働きに出る中で、末子のソロモンだけは実家の者のようにタルムード学者になってほしいと願っていた。このような母の期待に応じて、ソロモンは、旧約聖書に律された日常生活の中で、4歳の時にはヘブライ語で創世記を暗誦した。また、読書の習慣が身につくという、結果として幸運な出来事は、8歳の時結核のため半年ばかりの入院生活を送ったことが考えられる。病気の性質上、母親からさえも隔離された小児病棟の病室で、与えられる限られた本を基に、少年の想像力は大きく羽ばたいたことであろう。⁹ また、母ライザにとって、多様な人種と言語が混在する見知らぬ環境は混乱を招くものであったが、ソロモンにとっては、このような多重言語は「思考と表現の自然な形態」[“a natural mode of thought and expression” (Siegel, 63)]であった。そこでは、言語がその基盤をなすところの文化も、自ずとソロモン自身に浸透して行ったであろう。

ところで、東欧では18世紀中ごろ、正統ユダヤ教における聖書の解釈をめぐるタルムード学者の果てしない議論の非日常性・抽象性への反逆から、歌と踊りと物語という共同体的行動によってユダヤ人民衆の心を捉えた運動、ハシディズムが起り、19世紀までにはこのハシディズムが東欧ユダヤ教の正統となった。¹⁰ ライザの末息子にかけられる願望は、時代に逆行する、崩れ行く正統への執着とも考えられる。その母は、ソールが15歳のときに病死している。ライザの願いは、Ben Siegelが指摘しているように、タルムード学者としてではないが、作家ソールの作品に表れているその薫陶の成果に叶えられているのである。¹¹ また、作家としてのペローの特性を、ニューヨーク時代 Bard College の同僚でもあった Jack Ludwig は、その著書のなかで、ペローは、「創造するよりも議論することの方を好む。彼の先祖は、創世記の作者ではなくて、創世記を分析するタルムード学者なのだ」と、創造力を旨とする作家としては弱点ともなり得るペロー固有の特性を挙げている。¹² 旧約聖書の最高の理解者・解釈者としてのタルムード学者は、共同体の指導者であり裁きの庭の調停者であり、身の上相談のカウンセラーでもあった。共同体

に結婚して、ニューヨークへ出た。彼は、ニューヨーク大学の大学院博士課程で論理学を専攻するが、実証主義に飽き足らず一年で辞め、*New Republic* や *Partisan Review* を拠点とし、知性派作家として目覚ましい活躍を開始した。

ローゼンフェルドが編集スタッフとして関わっていた *New Republic* に、ベローは数回書評等を寄稿しているが、44年の *Dangling Man* 発刊以後もなおシカゴに留まっていた。47年 *The Victim* を出版前後は、ミネソタ大学の英文学助教授の職を得ていたが、グッゲンハイム奨学金を得て48年から2年間パリに滞在し、ヨーロッパを旅行した。*Augie March* の原稿は、パリのカフェテラスや、旅先の公園のベンチにすわって書き続けた。⁴ 50年帰国後、続く10年間の大部分はニューヨーク市とニューヨーク州ダッチェス郡チボりに住むことになる。50～52年、ローゼンフェルドと共にニューヨーク大学の夜間部で教えた。⁵ この頃、*New Republic* の編集者で、ローゼンフェルドの妻が秘書をしていた、Alfred Kazin (1915—) と出会っている。52年から一年間、シュワルツの assistant としてプリンストン大学創作科で教えることになり、ベローは、ニューヨーク知識人グループから離れていった。この頃、同僚の詩人 John Berriman (1914-72) に *Augie March* の出来上がり原稿を見てもらったり、ベリマン宅でのパーティーで Irving Howe, Edmund Wilson, Carlos Baker などと出会った。⁶

東欧ロシア移民とユダヤ性

1913年、ベローの両親 (Abraham & Liza Bellows) は、帝政ロシアからカナダ・モントリオール郊外のラシーヌへ、先に移民していた父の姉を頼って移住した。⁷ ところで、ツァー支配下のユダヤ人は、寄留国へ同化してブルジョワジーに属していた西欧ユダヤ人と違って、過酷な徴兵制という法制的差別の下で、大多数が貧民であった。ロシアのユダヤ人が西欧ユダヤ人と異なった最大の決定的な点は、正統ユダヤ教の遵守であった。⁸ 母ライザは、シ

に引き合いに出された Delmore Schwartz (1913-66) は、1937年に短編小説“*In Dreams Begin Responsibilities*”（「夢の中から責任が始まる」）で鮮烈なデビューを果たしたユダヤ移民二世の若手作家であった。

1930年代初め、ハイスクール時代のベローは、「ロシア文学会」(“the Russian Literary Society”) に所属して、メンバー間で作品を朗読したり批評し合った。ロシアからの移民の子弟にとって、身近に感じられる外国文学は、ロシア文学であった。この頃は、「コミュニストにあらざる者は、リベラリストにあらざるというインテリ左翼全盛の時代」でもあった。²そして、才気煥発で「神童」と言われた親友 Isaac Rosenfeld (1918-56) と共に、Tuley High Debating Club (テューレイ高校討論クラブ) で、哲学を論じ合ったりしていた。1933年ベローは、シカゴ大学に入学したが、当時の大学の雰囲気馴染めず、2年後 Northwestern 大学へ編入し、Melville J. Herskovitz 教授の下で文化人類学を専攻、優等生で卒業した。次いで大学院では英文学を志望したが、当時のノースウェスタン大学英文学学科長であった William Frank Bryan から「ロシア系ユダヤ人の息子としては、アングロサクソンの伝統、英語に対する適正なフィーリングを恐らく持たないであろう」と判断されて、受け入れられなかったことに痛く傷ついたが、Herskovitz 教授の取り成しで Wisconsin 大学大学院での奨学金をもらい、文化人類学専攻に落ち着いた。ところが、37年、クリスマス休暇でシカゴに帰省したベローは、結婚したまま大学院へは戻らなかったのである。³

新居を義母所有のアパートに定め、WPA (公共事業促進局) 作家援助プロジェクトに従事して中西部出身作家の伝記を書いたり、師範学校での講師や、ブリタニカ編集部で働いて、生計を立てながら作家修業を積んでいた。41年、最初の短編“*Two Morning Monologues*”が *Partisan Review* (May-June) に採用され、翌年には、“*The Mexican General*”が、43年には「宙ぶらりんの男の手記」が掲載された。そして、44年、長編第一作 *Dangling Man* の出版となった。

他方、ローゼンフェルドは、41年シカゴ大学大学院修士課程を修了と同時

Saul Bellow における シカゴへの回帰の意味

池田肇子

The Adventures of Augie March (1953) において、Saul Bellow (1915-) は、小説を”I am an American, Chicago born,...”という宣言で始め、前作 *The Victim* (1947) で確認した自身のユダヤ性を生育の地シカゴに移植して、アメリカに生きる移民二世のユダヤ人としての自己のアイデンティティを模索する。

作品は、1930年代の大恐慌の最中であってユダヤ人地区でたくましく生きる少年の家庭生活からはじめて、主人公オーギー・マーチの波瀾に満ちた青年期を描いている。本小説が出版された当時、両大戦を経験したアメリカは、アイゼンハワーの政権の下で空前の繁栄を迎えつつあった。このような“adopted land”としてのアメリカを、ベローはどのように受け止めようとしたのだろうか。

1940年代のニューヨーク知識人

1941年初頭、*Partisan Review* の編集者 Philip Rahv は、新婚間もない(建築家の)妻の仕事のためにシカゴに滞在していた。その時、若き“ex-Trotskyist”としての Saul Bellow と接触し、“the Delmore Schwartz type: brilliant and yet at the same time methodical and responsible”という印象を報告している。¹その後、ベローはニューヨークへ出向いたと考えられるが、ラーヴ